

床ずれ通信

No.2

2008/03/11 発行

発行者:NPO法人床ずれ研究会
 理事長 久保 忠一
 事務局千葉県鴨川市広場1709
 TELfax 04-7093-6030
<http://tokozure.kamogawa.jp>
 E-mail:tokozure@kamogawa.jp

褥瘡(じょくそう=床ずれ)は必ず治癒する



床ずれ研究会では科学的でオリジナルな治療法を開発しており、エビハラ病院では褥瘡に対する取り組みは全国でもトップレベルで、ひどい褥瘡の状態でも入院されても、完治されるケースが多くあります。

下半期(十九年十月以降)の活動概要(ホームページも参照してください)
 学会参加四回
 (日本創傷治癒学会二月七日横浜、褥瘡学会地方会二月九日東北(秋田) 三月一日北海道(札幌) 三月二日近畿(京都))

学会発表各一演題
 講演会開催一回
 (創傷治癒学会では二演題)
 (二月二十六日鴨川市亀田医療技術専門学校)
 藤広満智子先生による「高齢者の皮膚疾患」
 千葉大学、千葉科学大学で継続中

基礎研究
 臨床研究
 製剤技術開発
 共同開発を一社と継続中
 エビハラ病院他三病院継続中

情報・意見交換
 情報交換等のため訪問した医療機関等十四施設
 共同開発を一社と継続中
 松本市相澤病院、鳥谷部先生の褥創回診に同行

高齢者に関する相談支援
 (相談内容内訳、介護保険制度一件、予防のための寝具一件、治療法七件、うち一件は物理的に主治医に掛かれない患者さんの傷の写真を撮り、主治医の指示を仰いだ後に訪問看護師に治療法を伝える)
 (相談方法内訳 メール六件、電話一件、その他二件)



代表 久保忠一
 プロフィール
 1960年鴨川生まれ
 薬剤師・ケアマネジャー
 現在エビハラ病院
 薬剤師及び家業
 久保薬局でも従事
 日本褥瘡学会、日本
 創傷治癒学会、日本
 褥瘡学会、ヨウ素
 細菌学会、ヨウ素
 学会会員

超高齢化社会に備えて寝たきり防止と床ずれ予防・治療法の研究
 床ずれ研究会は、床ずれの研究と地域ボランティアを両輪に昨年
 二月の総会を持って発足し、五月に正式な認可を受けました。今
 年月現在の会員数は二十一人(正会員十三人、特別会員二人、ボ
 ランティア会員六人)、内訳は医師三人、薬剤師四人、理学療法
 士二人、看護師一人、大学教授等研究者四人などとなっております。
 お蔭様で全国でも認知されるようになり、著明な先生方からもユ
 ニークな団体として存在価値を認めていただいております。今後
 とも、社会に貢献する為に研究活動を行なうと同時に、地域社会
 にも具体的な貢献していきたく思いますので、ご参加下さいます
 ようお願い申し上げます。

老老介護の苦悩

少子高齢者社会が進行し、老人が老人を介護しなければならぬ老老介護。肉体的にはもとより、精神的、経済的負担が大きく、将来に多くの不安を抱える「老後」の現実が深刻である。介護保険制度がスタートして八年、鴨川でもついに悲しむべき事件が起きてしまった。介護をする八十代後半の夫が自分も病気になるた為寝たきりになると、既に寝たきりの妻が不憫だと思いつめた末の事件であり、行為の正当化はできないが、心中察するに余りある。

実は、心中や殺人事件は年間数十件も起きているそう、その多くのパターンは同じように寝たきりや認知症等の非常に重度な要介護者を抱えていることに、追い打ちをかけるように介護者自身が重大な疾患などを発症し、サポートも無い為絶望のあまり、発作的ではあれ心中などという最悪の選択をしてしまう。これは、決して他人事ではない。

厚生労働省の推計によると現在、認知症の高齢者は約百七十万人、団塊の世代が高齢者となる二〇一五年には二五〇万人に増え、二〇三〇年には六十歳以上の十人に一人が認知症という時代がやってくる。寝たきりの人の数もそれに匹敵する。

しかし、行政や医療機関がいくら頑張っても限界はある。それは組織としてしか対応はできないから、個々の職員に隙間を埋めさせるのは限界がある。もちろん、これまで以上に組織間の連携をより密にする努力をしなければならぬが、通常、医療機関のケースワーカーは立場上、「患者本人や家族からの希望があったり、医師や他の施設等からの連絡がなければ進んで動く」ということになる。

また、どここの役所の福祉課などにも相談窓口が設けられているが、出向いてこない限り立ち入らないのが原則である。増して、個人情報やプライバシーに配慮すれば尚更である。ただ、この問題は制度やマニュアルだ



けによつて解決できるものではない。状況を的確に判断できるセンスが必要になってくる。センスとはあの人は今限界に来ているのではないか、と直感でき、本音を引き出すことである。昔は地域の結びつきが強く、必ず一人くらい気の利いた人がいて、社会で支えあう事もできたが、今は核家族化と日々の生活に余裕のないことなどで、田舎でもそのようなことが期待できなくなった。そこで、力とされるのがNPOなどのボランティア団体である。事が起きてから対応するのは遅いというが、まだまだ潜在的な重大事件は特に認知症の要介護者を抱えるこの家庭でも起き得る。普通でまじめな人であるほど「自分も同じ事をしていたかもしれない」「やらない」という保証はない」と言う。介護の大変さは行った人でなければわからないのである。行政は何とか民間の力を使って、真に実りのある議論をしていただきたいと思う。もちろん個人情報を守りながら必要な情報を提供し、センスと行動力がありボランティアに日頃から携わる人々の力を十分発揮させ、その結果多くの人々が必要とする支援を与えることができる、と考える

♪歌による癒し Ⅱ

音楽による癒しは、音楽療法としてリラクゼーション等を通じて心身の健康維持・増進の目的として医学的にも根拠のあることとされています。なぜなら、音楽は、耳から入るストレスと同じ経路で脳へ伝達され、五感(聴覚)→大脳皮質→視床下部→①自律神経②脳下垂体と伝わり、①自律神経は「緊張とリラックス」に、②脳下垂体は「ホルモン」と「免疫力」に影響を与えるからです。音楽のジャンルによっても刺激する部分が違っても言われますが、何と云っても、やはり高齢者の方には昔懐かしい歌が良い、と思います。大脳の古皮質、旧皮質が刺激を与えられることによつて、意識下の世界にも影響を及び、より情緒的な面に作用し、昔の想いでに琴線が触れれば、時を越えて、少年時代にも、青春時代に帰ることができると考えます。



当NPO代表の久保が所属する地域合唱団「すばる東条」が市内デイサービスセンターを訪問したとき、美しい「もみじ」のハーモニーを聴き口ずさみながら、郷愁の情に皆様が涙ぐみ、「青い山脈」を口ずさんで、青春時代のように目が輝き、「幸せなら手をたたこう」で手をたたき歌いながら、全身が喜びに弾んでいました。いつもベッド上で過ごす人も体を起こし、手をたたき姿は、寝たきり防止の特効薬に他ならないと感じました。

